

手取川溪谷における耕地利用の変遷

矢ヶ崎 孝雄

一 緒 言

手取川は白山に源を發し、石川県下を流下して日本海に注ぐ延長七三軒の河川である。この流域は特色ある三つの地域に大きく分けられる。すなわち源流部は、白峰村を中心とする焼畑と出作りの地帯であった^①。現在、焼畑も出作りも退行し、その山村の生活も変貌をとげ、漸次過疎化現象が進みつつある。下流部は典型的な扇状地帯で、古来早場米の産地として著名であり、また戦前までは人口減少の農村地域として特異性を示していた^②。現在においては農業の先進地域であり、金沢・小松両市の中間にあり工業化の進展も著しく都市化が顕著である。

ここで扱う手取川溪谷部は以上の両地域の中間地帯で、行政上では右岸下流から鶴来町の溪谷部、河内・吉野谷の二村と、左岸の鳥越村の地域である。牛首川・尾添川が合流して手取川となる地点から手取川扇状地に臨む扇頂までの山間地帯である。手取川はこの間においては峡谷をうがって流下し、岩石段丘を發達させている。この峡谷部は手取峡谷と称され、観光客の来訪も多い。その段丘面は畑作が卓越していたが、明治以降開田が進み、現在は一面の水田地帯となり、北陸の水稲単作地帯の一翼を荷っている。

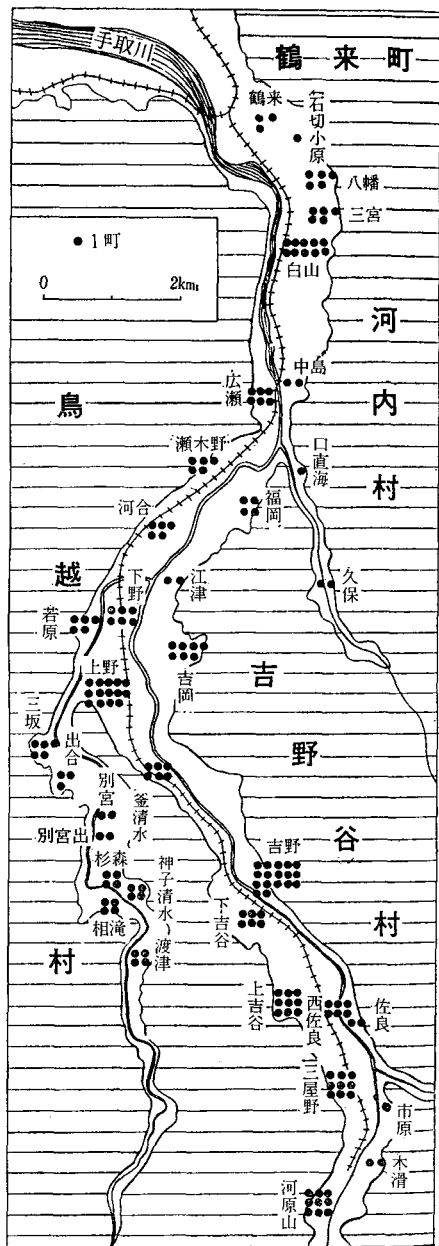
手取川流域は下流から上流に向い、積雪量は増大する。とくに扇頂の鶴来から溪谷に入ると急増し、昭和一〇〜一九年の平均値では最高積雪は鶴来で二二一糎ものが、鳥越村河合で二〇三糎、吉野谷村市原で二〇六糎となつてゐる。源流においてはさらに著しく、白峰村市ノ瀬では三〇六糎に達する^⑧。この溪谷部においては「白山下」駅まで金名線の電車が通じ、よほどの豪雪時でない限り杜絶はしない。なお近年は冬季久しく陸の孤島とされた白峰村にまでバスが通じ、この溪谷部でもバス交通の恩恵に浴するようになった。

この地域は手取川源流部を含め、鶴来谷といわれた。古くから葉煙草の産地で、専売制施行前までは鶴来で刻煙草に加工された^⑨。現在、煙草耕作は僅かになっている。ここでは煙草から水稻への耕地利用の変遷を調べ、その因由をこの地域のもつ条件とのかみあいのもとで明らかにしようとするものである。

二 煙草耕作の変遷

鶴来煙草と手取川溪谷 手取川の谷口に立地する鶴来は、白山比咩神社しらやまひめならびに金剣宮きんけんの門前町として発達し^⑩、六斎市をもつ市場集落として栄えてきた^⑪。その地理的位置の優位性は、市場町として、また白山参詣の加賀側の拠点として恵まれた条件下にあつた。白山登頂の径路に三馬場があり、美濃馬場は長滝寺、越前馬場は平泉寺であつたのに対し、加賀馬場は鶴来の白山本宮（白山比咩神社）であつた。中世この衆徒（僧兵）は神輿をふりたてて上洛し、強訴をするほどの実力をもち、鶴来の町も著しい発展をあげてゐた。

一方、鶴来は近世において刻煙草の産地としても秀で、鶴来煙草として金沢・松任から越中石動方面にまで販売された。かような背景と関連もして、煙草王と称された村井吉兵衛の先代は鶴来から京都に出て、加賀刻煙草を一手販



(日本専売公社金沢地方局資料により作成)

図1 手取川溪谷における煙草耕作地域 (大正一〇年)

売して成功したのであった。ところで、鶴来煙草の原料の葉煙草は主として手取川溪谷で栽培されたものであった(図1)。とくに手取川溪谷の葉煙草は良質とされ、油粕を用いる多肥栽培をはやくより行っていた。

鳥越村の河合付近は古くから中心的な煙草産地であったが、明治以降一時退行した。明治一六年には吉谷の農民を鹿兒島県分地方に派遣し、技術と良種の導入を図った。この結果、鳥越村の煙草耕作は復活し、別宮・上吉谷・下吉谷・釜清水に普及した。明治三一年煙草専売施行に伴い耕作反別は減少傾向にあり、このため鳥越村では煙草耕作組合を結成し、那費の補助を得て、その発展に努めた。大正五年以降は松川葉が耕作され、鶴来葉とも称され

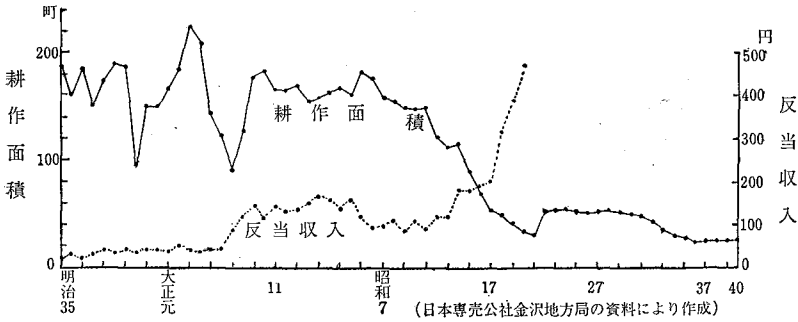


図2 手取川溪谷における煙草の耕作面積と反当収入の推移

た。

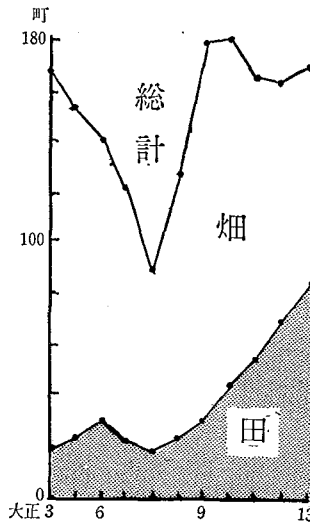
煙草耕作の推移 図2は明治三五年以降の手取川溪谷における煙草耕作面積の推移を示したものである。現在、この谷は煙草の主要産地ではなく、石川県下の煙草耕作は能登に主体をおいている。明治三五年以降の手取川溪谷における煙草耕作の減退傾向は、なお仔細に観察すると、つぎの三時期に区分ができればよい。

明治三五年から大正一〇ころまでは、年による変動の大きい時期で、一〇町歩から二〇町歩の間を變動している。このあと昭和一〇年ころまでは比較的安定した時期で、耕作面積は一六〇町歩程度を持続している。このあと現在までは減退・停退期である。このうち戦前戦中は著しい減退を示し、昭和一九年には約四〇町歩に減じた。戦後は若干増加し、昭和三〇年ころまではほぼ五〇町歩の面積を耕作し安定的であった。その後はさらに減じて三〇町歩たらずの面積を示すに過ぎない。盛時の耕作面積と比較すると、現在は約1/10という状態である。

三 米作・養蚕との関係

田畑面積の推移 手取川溪谷における煙草耕作は田畑ともに行われる。図3

に示すように、大正時代においては水田における煙草耕作が漸増の傾向を示してきている。煙草は田畑のワクを越えて耕作され、米ならびに畑作物との比較において有利性が示される場合には、どちらへも作付されたとみることができるところで手取川溪谷の耕地は岩石段丘上に展開した耕地が主要部をなすもので、峡谷を流下する手取川の水は段丘



(日本専売公社金沢地方局資料より作成)
 図3 手取川溪谷における煙草耕作面積の推移

まるようになった。戦後の統計は常畑に限られ基準を異にしているが、水田面積の増大には著しいものがみられる。かような開田化の進展は、その一部に煙草耕作が行われることを認めるとしても、水稻栽培の有利性を背景にしてのことといつてよいであろう。とくに戦後における米の作付面積の増大は著しいが、戦前においても漸増の傾向が明らかに示された(表1)。このためには段丘上に灌漑水路を建設しなくてはならず、多大の苦心を払ったわけであるが、これは後述することにする。

面に揚水することは不能であり、畑の卓越地域であった。水田は谷川の水を灌水できる地域の僅かな面積に限られていた。図4は手取川左岸の鳥越村の場合を示したものであるが、本来、畑は焼畑などを含めて、水田のほぼ三倍の面積を示していた。大正・昭和以降は耕地総面積に変動はほとんどないにもかかわらず、水田面積が増大し、昭和一四年には畑は田の二倍強に止

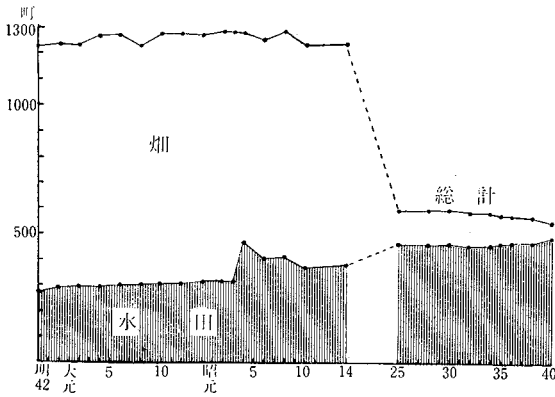


図 4 鳥越村における耕地面積の変遷

(鳥越村村治一覧・石川県統計書により作成)

表 1 鶴来谷における米作付面積の推移

	鳥越村	鶴来町	河内村	吉野谷村
大正4年	358.6町	49.4	118.1	40.6
9	370.8	55.0	122.7	41.0
14	362.1	54.2	122.9	78.2
昭和6	420.1	55.2	122.8	89.5
10	423.1	35.1	129.9	86.2
15	475.5	45.1	164.1	121.2
30	435.3	× 993.2	(146.5)	94.5
35	501.5	1,028.5	× 73.0	109.0
40	497.0	1,010.0	79.0	109.0

石川県統計書・市町村勢要覧による。

×は町村合併により変動したもの、()は分村の分を含めた数値。

表 2 鳥越村における主要作物

(大正 6 年)

		作付反別	収 穫 高
	米	3,713反	185,576円
	麦	1,602	12,752
蕎	粟	962	7,700
	稗	325	4,680
	大豆	721	10,820
大小	豆	763	13,740
その	豆	541	5,200
他	穀	375	5,026
甘	薯	500	6,250
葉	草	978	42,020
	煙		60,320
	鹵		

鳥越村治一覽表による。

畑作物の推移 卓越した畑の栽培作物としては粟・稗・荏・大豆・小豆などの雑穀、甘藷・麻・蕎麦(煙草のあと作)などの自給作物があった。鳥越村における大正六年の栽培作物をみると(表2)、米は面積・金額ともに最高であり、麦・蕎麦・稗・大豆など多様な雑穀類が栽培されていた。商品作物としては米のほか、葉煙草と鹵があった。なお手取川溪谷においては桐を畑に植え、これを鶴米に販売もしていたが、農家の現金収入源としては米と葉煙草と鹵とが主軸をなしてきたわけである。それらの作付面積や金額の面では断然優位に立ち、とくに昭和以降に米の比重が増してきている点は図5によっても明らかである。

養蚕は手取川源流の作り山村では主要な現金収入源であったが、手取川溪谷では重要性は煙草に比較して低かった。その最盛時の大正八年において、手取川溪谷における桑園面積は約六四町歩、畑の総面積一九四〇町歩に対しても極めて僅かであった。しかし大正中期までは鹵の収入は煙草を若干上回っていたことは、図4の鳥越村の場合でも明らかである。しかし、昭和に入ってから不況により減少していったが、養蚕戸数の著しい減少にはならなかった(表3)。

むしろ桑園は若干増加し(表4)、また養蚕の諸設備など相当に資本投下をしてあるので、早急な転換はできないものであったことも関係している。その衰退は戦時中の桑園の潰滅により決定的となった。また、この時期は煙草栽培も減少し、専ら食糧増産に力が注がれたわけである。

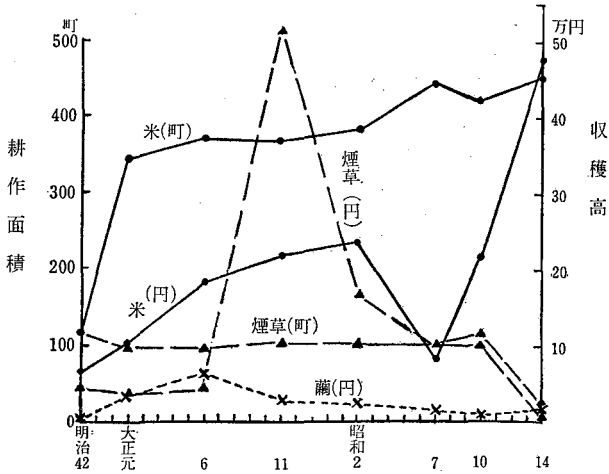


図 5 鳥越村における米・煙草・繭の推移 (耕作面積・収穫高)
(鳥越村村治一覽により作成)

表 3 手取川溪谷における養蚕業の推移

		鳥越村	鶴来町	河内村	吉野谷村
養蚕戸数	大正 4年	499	24	291	325
	7	650	7	420	319
	8	380	15	500	280
	12	450	7	307	169
	昭和 6	349	4	263	167
	10	217	2	199	99
	15	138	—	136	27
掃立数量	昭和 6	6,073 g	216	9,528	4,415
	10	4,288	30	8,493	2,732
	15	1,945	—	3,100	750

石川県統計書による。

表 4 手取川溪谷における耕地

(昭和 4 年)

	鳥越村	鶴来町	河内村	吉野谷村
耕地面積	766.7町	77.9	331.4	210.8
田	468.3	55.9	137.3	110.2
畑	298.4	22.0	194.1	100.7
普通畑	266.7	13.3	147.8	91.0
樹木灌木畑 栽培	31.6	8.7	46.3	9.7
桑畑	19.1	7.3	39.4	7.4
茶畑	0.3	0.1	—	—
果樹畑	1.2	0.3	0.1	—
其ノ他	11.1	1.0	6.9	2.3

内閣統計局 農業調査結果報告による。

戦後において煙草耕作も養蚕も復旧するには至らず、農業は米作を中心とし、水田面積の増大が計られてきた。米作以外では雪中カンラン、花卉などの栽培が一部の専業農家により進められているのが注目されるほかは、耕地利用の著しい進展はみられない。

四 耕地利用変遷の要因

米・繭・煙草の特色 わが国の農民は米作を最も有利な安定作物として、伝統的に体感し栽培してきている。手取川溪谷部の農民にとっても、この点は同一であることは、すでに江戸時代より鳥越村の地域において、段丘面の開田化に努力を払ってきたことにも示されている。しかし、灌漑用水を引き得ない限り、畑作による収入増大を計らなくてはならなかった。煙草が商品作物として江戸時代すでに価値高いものであったことは説明の要もないことであるが、鶴来煙草の製造地を控えたこの地域は、葉煙草産地として発展し、鶴来葉という銘柄のもとに耕作が進展した。煙草専売制の施行によって、鶴来の煙草製造は消滅したが、手取川溪谷の煙

表 5 手取川溪谷における煙草と米の反当収支

			明治42年		大正11年	
			煙草	米	煙草	米
収支損	入	金	34.05円	22.97	141.23	61.24
	出	金	54.16	32.85	126.26	76.26
	損	益	-19.11	-9.88	14.98	-14.02
支出金の内訳	公	費	0.72	3.28	1.41	6.06
	耕作地	地代	2.72	7.47	7.01	22.75
	人夫	賃代	30.01	9.87	61.66	18.29
	苗床	肥料代	1.38	0.62	2.07	1.51
	本圃	肥料代	12.91	7.66	33.70	16.03
	材	材料代	2.92	0.57	13.81	2.21
	器	具損	0.61	2.23	1.20	1.99
	雑	費	1.89	1.16	5.40	6.41

日本専売公社金沢地方局資料による。

草耕作は持続した。煙草耕作は許可制となり、その代価は決して高価ではなかったが、「賠償金」の名目で専売局より確実に支払われた点、極めて安定的な作物となった。ところで、養蚕は繭価の高騰によって普及をみたが、その量は著しくはなく、大正中期をピークとして、漸減傾向を示したことは前述の通りである。ただし、手取川溪谷においては、米・繭のほかには煙草を除いて有利な商品作物はなかつたので、煙草と競合する作物としては米が最も重要性をもっていたのである。

米と煙草の収益性 米と煙草の反当収支状況を示したのが表5である。明治四二年と大正一一年を比較しても収入金は煙草の方がはるかに大きい。ただ支出金も煙草の方が同様に大きく、その収支では赤字の場合が著しく多い。ところで、支出金の内訳をみると、その主体をなすものは人夫賃であり^⑧、とくに煙草の場合にその額は著しい。煙草耕作が所要労働力の大きい点は、この時代においても同様であった^⑨。ただこれを自家労働力の燃焼

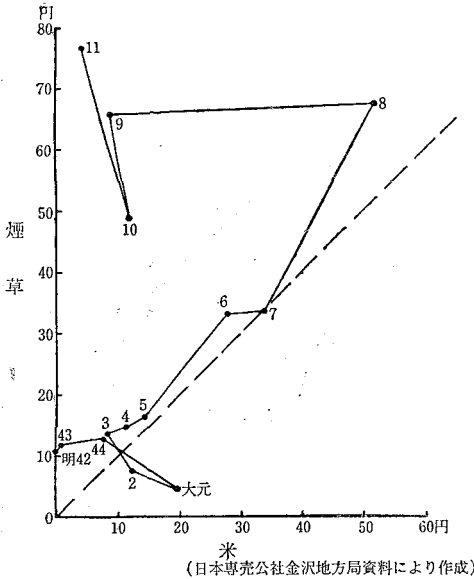


図 6 手取川溪谷における煙草と米の反当
収入の比較 (明治42年~大正11年)

と、「イイ」(結)とによりまかかってきたので、人夫賃の大部分はおのずから農家の手許に残ったのである。そこで、損益と人夫賃とを加算し、米と煙草の収益性を図6で比較してみた。明治四二年から大正一一年に至る間、煙草は米より見かけ上、大体有利であった。とくに大正八年以降はかような点からして、はるかに煙草が恵まれていたが、これは同年に専売局が賠償価格を改正し高額とした結果によるものである。

かような結果は昭和初年まで持続し、煙草は安定作物として耕作が続けられた。当時、繭価は暴落し、米価も変動していたので、煙草はいっそう有利な商品作物となっていた。

煙草耕作面積は図2のように昭和五年をピークに漸減に転じたが、この時期を境にして煙草の反収もまた減じた。

これは煙草の疋当たり単価が下落したことも関係し、昭和四年八五・二銭、同五年七六・一銭のものが、同六年には五三・〇銭となり、同一二年まで六〇―七〇銭台を低迷していた^⑧。

このあと煙草の単価は上昇したものの、戦時体制になり、食糧増産に傾斜していったので、煙草耕作面積は減退の一途をたどった。

開田の進展 手取川溪谷は前述のように、本来水田の乏しい地域であった。米の完全自給は不能で、栽培の各種雑穀を主食に当て、なお米を購入

もしていた^⑧。したがって用水を引き、開田化を計ろうとする希望は根強くみられた。

手取川下流の扇状地地域は、わが国における先進的な耕地整理事業の推進地域であった。すなわち明治二年より田区改正事業が進められた^⑨。手取川溪谷の兩岸は当時郡を異にし、郡制施行の時代にあつては、耕地整理事業に若干の相異もみられたが、その自然条件においても差異があり、その進展も若干前後があつた。

左岸の鳥越村地域は能美郡に属していたが、ここではすでに江戸時代から牛首川の水を上流の仏師ヶ野で引水し、段丘面の開田化を計る計画があつた。明治初年、これは吉原用水として完成し、釜清水までの畑を水田化した。明治末期その水田面積は二四〇町歩で、吉原用水普及利水組合を三三二人をもつて組織していた。また手取川支流の大日川用水は二七〇町歩を灌漑していた。大正年間においても開田は進められ、昭和初年には河原山でも開田化が進められ、水田の卓越地域となつた^⑩。

手取川溪谷右岸の石川郡下においては、河内村三箇（吉岡・福岡・江津）用水が手取川本流の水を吉野谷村にて揚げ、二六町歩を灌漑していたが、この地域の開田は発電所建設と密接な関係があつた。すなわち発電所建設に伴い、建設用地等の協力を条件^⑪にその分水を得て、段丘面の開田化を計つたのである。

当地域では発電所の建設は明治四四年の福岡第一発電所（最大出力三七六〇KW）を第一とし、大正七年の福岡第二発電所一三〇〇KW、大正九年の市原発電所（最大出力一〇八〇KW）、同一〇年の吉野第一発電所、同一五年の吉野谷発電所（一二五〇〇KW）が建設され、昭和に入つても小規模発電所がつきつきに出現した。このうち市原発電所からの分水で市原に水田八町歩が開かれ、吉野第一発電所の分水で吉野に水田五二町歩、吉野谷発電所により木滑に水田二〇町歩などが開かれた^⑫。このため発電所建設は地元農民に歓迎された。また大正中期には点燈されるに

至った。

市原発電所の場合、部落の上部で分水を得たので、これを引きおろして、斜面から段丘面一帯を開田した。畑や桑畑の土地を極めて整然と区分したが、地形や傾斜に応じて、八×一五間(二二〇歩)、六×二〇間(一二〇歩)に区画した。傾斜地は五×一四間(七〇歩)を標準にし、六〇歩のものもでき^⑧、耕地は再配分された。この結果、ここでは棚田が整然とならび、石垣の配列も見事である。現在からすれば、規模は極めて小さいが、当時としては画期的な土地利用の変化であった。

手取川溪谷の右岸地域には白峰村に通ずる県道があり、これが白峰まで車道に改修されたのは大正一三年であった。それまで、沿道の農民の現金収入の手段としては、白峰村桑島までを日帰りする歩荷があった^⑨。白峰へ米塩魚醬油酒などの生活必要物資を上げ、板・木羽などを下げた。その駄賃は一日平均三五銭、五〇銭の稼が最高であった。当時米一升が一一銭で米三升が平均的な稼であったという^⑩。そのほか市原紙(障子紙)の製造もあり、煙草とともに農家の現金収入源となっていた。開田化の時期は駄賃稼の退行期でもあり、米作と煙草作とに対しては農民の期待も大きくなっていったわけである。

手取川溪谷の耕地が畑の卓越地域から、水田の卓越地域へと変ったことは、戦中戦後の食糧難時代において食糧確保のうえから功績は顕著なものがあつたのである。

米作と兼業農家の増大 戦後米作は食糧不足のもとで、その有利性を高め進展した。一方、煙草耕作は従来の松川葉(鶴来葉)の耕作から、第二黄色種の耕作に昭和二四年より変った。松川葉は天日乾燥によつたが、第二黄色種は火力乾燥を要求された。このためには乾燥室の建設に六万円を要し、さらに労働力が集中的に必要なになった。これに對

表 6 手取川溪谷における県内他市町村への就業者・通学者

		鳥越村	鶴来町	河内村	吉野谷村	
常 住 者	昭和 35年	3,217	6,948	952	1,562	
	40年	3,459	7,542	867	1,483	
県内他市 町村への 就業者・ 通学者	総 数	35年	368	1,187	112	275
		40年	738	1,844	277	394
	就 業 者	35年	287	983	81	222
		40年	516	1,441	191	270
金沢への就業者 ・通学者	35年	123	860	39	66	
	40年	289	1,345	83	152	

国勢調査資料による。

してヤミ米を販売した方が有利であり、煙草耕作は停滞的となってしまった。一方、昭和二八年ころからは土工に出る農民が増加してきた。これは手取川水害の復旧工事や道路建設工事などで、冬季は失業保険の給付を受けうるのも、これは煙草耕作よりはるかに有利であった。米作と土工による現金収入とはこの地域の農家経済の二大支柱となったわけで、兼業農家の比率が増大するに至った。

ところで鶴来と白山下を結ぶ金名線は昭和二四年電化され、鶴来谷交通の動脈としての機能をいっそう高めてきた。これを前提として、昭和三〇年代以降の経済の高度成長は、この谷筋の農村労働力を都市にますます強く吸引するに至った。金名線沿線の通勤者は鶴来・金沢への通勤が主体となり、表6のようにその人数は近年いっそう増大してきている。なかにはマイクロバスによってこの谷筋の労働者を送迎する工場もみられるようになった。かような傾向のなかで、農業は婦人に委ねられているが、米作主体の農業はその省力化もあって、一応現状では持続されている。

商品作物栽培 かようにして手取川溪谷における耕地利用は米作を主体として、他の商品作物栽培への発展は薄らぎ、停滞的な状態

を示しているといえよう。通勤・土工（日稼）などによる現金収入は農業の発展にも影響を与えている。

ところが、特定の地域においては他の商品作物への進展がみられる点、大いに注目してよいことである。すなわち上吉谷においては煙草の跡作に雪中カンランを栽培し、また花卉栽培にも力を入れている。これらの収入は煙草にほぼ匹敵するといわれる。一方、水田の乏しい渡津・相滝辺においては椎茸・エノキ茸栽培を行っているが、この地域は交通条件にも恵まれず土工にも出ない。

五 結 語

手取川溪谷は岩石段丘の地域で、元来は畑の卓越地域であり、古くから葉煙草産地として著名であった。農家の現金収入として、煙草は見かけ上有利な作物であった。しかし食糧自給の不能なこの地域では、開田化への熱意も強かったが、用水に恵まれぬ段丘上の開田化は手取川から揚水するほか手段がなく、それには多大の困難を伴っていた。

左岸においては手取川よりの引水により開田化が進展した。ところが、右岸においては大正中期以降に手取川水系に発電所の建設が進められた。この際、発電所関係用地の提供に協力することを条件に、その用水を永久無償で分水する契約が成立し、これを契機に開田化が進展した。こうして、この溪谷の畑作地域も北陸の水稻単作地帯の一環となす結果となった。

とくにこの開田化の進展は食糧不足時に大きな貢献をしたが、戦後はその省力経営や交通の近代化に伴い、通勤や土工などによる農外収入の機会が増大し、耕地利用は米作に停滞する結果となった。しかし農外収入の増大と米作により農家経済は安定的になった。他方、煙草耕作は著減し、その他の商品作物栽培も抑制される結果となった。野菜

・花卉・椎茸などの栽培は、交通条件に恵まれない特定の地域に限定されるに至った。

この研究は鶴来商工会七十年誌の編纂のため、調査を進めている間に着目したものである。なお現在、鳥越村史編纂のため調査を開始しているので、不備な諸点はその進展に応じて補正していく所存である。この研究にあたり、鶴来町、鳥越村を始め関係諸村や専売公社その他関係各位から、絶大な教示を賜ったことに深甚なる感謝の意を表すものである。

注

- ① 田中啓爾・幸田清喜 白山山麓に於ける出作地帯 地理学論文集 昭和八年 四五七―四八八頁。
- ② 井上修次 農村人口減少の実態並に農村生活点描―石川県山島村小誌―日本地誌 I 昭和一七年 一―五五頁。
- ③ 農林省農業総合研究所 昭和一〇年以降一〇カ年市町村別積雪調査 昭和二七年。
- ④ 石川県鶴来尋常高等小学校 郷土誌 昭和一〇年。
- ⑤ 若林喜三郎・矢ヶ崎孝雄 鶴来商工会七十年史 昭和四三年。
- ⑥ 中島義一 市場集落 昭和三九年。
- ⑦ 石川県能美郡役所 石川県能美郡誌 大正一二年。一〇六九―一七〇頁。
- ⑧ 横田忠夫 たばこ栽培地域論 昭和四二年 三四頁。
- ⑨ 服部満江 日本煙草経済論 昭和三二年 一七二―一七五頁。
- ⑩ 池上鋼他郎 白山連峰と溪谷(昭和一〇年)にはつぎのように記してある(二四七―二四八頁)。
白山聚落民は煙草栽培より仕上げまで一切を成すことに於て唯一の生業としてゐる。然し体した収益あるにあらざるも地に即せる天与の資である。

陽春の気漲らんとする時、煙草の苗床が早くも作製される。されど其位置は地形と方位を選定し日当りよき処に於て高一尺、幅六尺、長さ一定せざるも概して長方形の型に堆肥を積み重ね其上に播種し藁灰をかけ、更に其上を藁にて軽く薄く覆

ひ、尚薄布をかけ、所謂温床化したる方法で日光の直射をさけ、又降雨に遭はさないやうに周到なる注意を要するので専売局派出員の指揮を俟つことになつてゐる。収穫期なる秋に到るまでは多忙で、天候多雨の年に際会せる時は草葉出来過ぎて柔となり、目がかず又ハサに懸くも腐敗を招くやうになる。要するに葉の乾燥と黄金色を呈する色合と、目方と風味等凡ての点に吟味をなし、以て品位を定むることは容易からぬ困難を嘗め経験を積み、そして工夫を凝らさなくてはならない。其他栽培法によつて一段歩に於ける収穫高三十円乃至百三十円の差等を生ずるが故に年により栽培者によつて年の取得金額が一定せざる理である。普通百目十五錢乃至三十三錢の賃金を得る。

八月十日前後に最初地葉より掻き次第に中葉、天葉と云ふ順に採り十月末までに悉皆掻き終り順次乾燥せしものを家に容れ、冬季に入り葉一枚づつ奇麗に広げ良否を撰り分け、一等より八等に分類し、年の十二月と翌年二月と、二回に煙草専売局へ収むるが、その時期／＼に当局より村々に日割して幾捆を輸送すべく請求する手順になつてゐる。又毎年春各部落に於て煙草耕作段別を予定し局へ申請すれば都度許可をうる事になつてゐる。

⑩ 日本専売公社金沢地方局 統計書類（鶴来出張所明治三十五年以降煙草耕作収納事項表）。

⑪ 吉野谷村市原 坪川助松（明治二〇年生）氏談によれば、開田が進む以前にはこの地域の常食はつぎのようであつた。朝食は米麦半々で炊き、稗の粉をかきまぜて食べた。昼食は米の飯、夕食は蕎麦、黍の団子で、豆類もよく食べた。

⑫ 石川県石川郡自治協会 石川県石川郡誌 昭和二年 二二五—二五〇頁。

⑬ 前掲⑥ 三七三—三七四頁。

⑭ 吉野谷村役場水利権に関する届出書 市原発電所建設の場合、用水路築造のための敷地売買価格はつぎのようであつた（一歩につき）。田三円、畑二—一円、山林原野拾錢。

⑮ 前掲⑭ 吉野谷発電所の木滑用水との契約書のなかには、発電所側が「発電所工事竣工其の筋の許可次第、永久無料にて面積式拾町歩に対し、水槽より田地灌漑用水を提供するものとす」、「不用水は永久無料にて提供する」ことを記してある。

⑯ 市原 坪川助松氏談。

⑰ 矢ヶ崎孝雄 白山麓白峰村の歩荷—山村と担夫交通— 金沢大学教育学部紀要第八号 昭和三五年 八八—一〇五頁。